ノールグレンツの赤点魔女

徒然サラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ノールグレンツの赤点魔女

【Ｎコード】
Ｎ１６９５ＢＡ

【作者名】
徒然サラ

【あらすじ】
魔法の素質がある者のみが入学できる王立魔法学校ノールグレンツ。
生まれ持った魔力を買われて入学したビアンカだが、筆記試験は毎回不合格で、ついたあだ名は赤点魔女。
今度の補習課題は、名家出身のクラスメイト・ルーカスの人間不信を治すこと！？しかもルーカスはビアンカの成績を上げなければ落第されてしまうことになって――

序章

唸るような風が吹きすさぶ。
上質だが着古された外套を翻して、彼は振り向いた。
遥か向こうにそびえ立つのは、年月を感じさせる重厚な造りの城。
彼は、それをありったけの憎しみを篭めた目で睨んだ。

「…俺は、もう二度とここに戻らない」

それは彼の最後通告だった。
もう一度外套を翻し、城に背を向けて歩き出す。
行く手を阻むかのように風の勢いが強くなる。それでも彼の足を止めることはできない。

その後、彼が城を振り返ることはなかった。

1　噂の赤点魔女

「ビアンカ・ホフマン」

名前を呼ばれた瞬間、ぐっと拳に力が入った。
いかにも高そうなビロード貼り椅子を引いて、ビアンカは立ち上がった。
小講堂のあちこちから刺すような視線と、わざとらしく気取った嘲笑を浴びながら教卓へと向かう。

（大丈夫よ。あれだけ頑張ったんだから）

教卓の前に辿りつくと、待ち構えていたディントス教官の眼鏡がキラリと光った。

「ホフマンくん。今回はなかなか頑張ったようだね」

「はい。それはもう、二晩徹夜で勉強しましたから」

ビアンカはホッと口元をほころばせた。よかった。今回こそは――

「ビアンカ・ホフマン１３点。放課後必ず教官室に来るように！」

＊＊＊

王立魔法学校ノールグレンツ。

それは、マージュ王国唯一の魔術師育成機関であり、魔術師の素質――つまり魔力を持つ者のみが入学を許可される。

マージュ王国のみならず、世界のほとんどは魔法によって発展を続けているため、魔術師になれば地位も名誉も財産もすべて手に入れることができる。

魔力は誰しもが持っているわけではなく、ごく限られたものが生まれ持つ才能のようなものだ。

しかし魔術師が高い役職を独占し、さらに近親婚を重ねた結果、貴族の家に魔力を持つ者が多く生まれるようになった。このことから、ノールグレンツの生徒の多くは貴族の子息である。

しかし数は少ないものの、平民にま魔力を生まれ持つ者がいる。その一人が、農夫の娘ビアンカ・ホフマンだった。

「もぉ嫌だ…。もう頑張れない」

授業が終わり、生徒でごった返している廊下を歩きながら、ビアンカはがっくりと肩を落とした。傍らを歩く少女が励ますようにその肩に手を乗せる。

「そんなこと言わないでビアンカ。先生も努力を認めて下すったやない」

「訛りがでてるよノエル」

ノエルと呼ばれた少女は、あらやだ、と手を口元に当てて恥じらった。

切り揃えた黒髪とほんのり赤くなった頬が愛らしいノエルは、はるか東に小さな領地をもつ領主の娘である。領主の娘と言ってもその暮らしは農民と大差なく、自ら鍬で畑を耕していたという。ようするに単なる田舎娘にすぎないのだ。
それによってか、彼女は学園唯一の平民であるビアンカの数少ない友人の一人であり、よき理解者でもある。

「それにしてもすごいじゃない。前回の小テストは8点だったのに、今回は13点も取れたなんて」

ノエルはビアンカが握りしめている答案用紙に目をやった。
でかでかと不合格の判が押されてそれは、すっかりぐしゃぐしゃになっている。

「それでも赤点には変わらないわ。ごめんね、ノエル。あんなに勉強を教えてもらったのに、また赤点で…」

その時、すれ違った女生徒がくすくすと笑いだした。

「ねぇ、今の子見た？あの赤毛…あの子が赤点魔女なんじゃない？」

「赤点魔女って、農民のくせに入学して筆記試験はいつも赤点っていうあの？やだ、ホントに髪まで赤いのねぇ」

聞こえよがしな嘲笑が遠ざかるのを待ってから、ビアンカはため息をついた。

「緑のリボンってことは、今の二年生よね。…はぁ、一体どこまで広まってるのよ」

「赤点はともかく、髪のことまで悪く言うなんて…。ビアンカの髪は夕日みたいで綺麗やのに」

「ありがと。それとまた訛ってるよ」

再び口に手を当てるノエルに苦笑しながら、ビアンカは髪に手をやった。腰まである長い赤毛を束ねている青いリボンは一年生の証である。

「赤毛なんて故郷ではありふれた髪なんだけど、やっぱりここじゃ目立つわね。私もノエルみたいな黒髪か貴族っぽい金髪だったらよかったのになぁ」

「それこそ金髪なんてノールグレンツじゃありふれてるじゃない。ただでさえみんな同じ制服を着てるのに、髪の色まで似てるから面白くないよ。私の黒髪だって制服と同化しちゃって冴えないし」

そう言ってノエルは制服の裾をつまんでみせた。ノールグレンツの制服は、古来からの魔術師の習わしにに従って男女ともに黒を基調としたものだ。ちなみに男子生徒はネクタイ、女子生徒はリボンの色が学年ごとに異なっている。

「それに、なんといってもビアンカはそこらの生徒よりもずっと魔法の才能があるじゃない。実技の成績は一年生のなかでも指折りだもの。みんなそれが悔しいからあんなこと言ってるんだよ、きっと」

「そ、そう？」

「実技教科は筆記教科より素質が問われるでしょ。今のノールグレンツはそれほど魔力がないのにコネと財力で入学した人たちも少な

くないから、面白くないのかも」

だからね、とノエルは微笑む。

「自信を持って。私も勉強を手伝うし、次こそきっと合格できるよ」

「ノエル…。ありがとう」

ビアンカがはにかむと、ノエルは照れ臭さそうに手を振った。

「それじゃ、私は寮に帰るね。また明日」

手を振りかえしてノエルと別れ、ビアンカは廊下の角を曲がった。窓から入る夕暮れの日差しが、ずらりと並ぶ木製のドアを照らしている。その中のひとつ、ディントスと書かれた札が掛けられたドアを前に、深呼吸をする。

「…よしっ」

コンコンと軽くノックをしてから、ビアンカはドアを開けた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1695ba/

ノールグレンツの赤点魔女

2012年1月9日01時55分発行